

---

# これからも、彼女で

光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

これからも、彼女で

### 【Nコード】

N9496X

### 【作者名】

光

### 【あらすじ】

ある日の事だった。岡崎奈々は塾の帰り道、近道をしようと公園の道を通ることにした。た、だが、その公園の道は最近、奈々の学校の女子生徒が高校生くらいの人組に襲われたと言う事件があり、学校では通行禁止と言われているのだが、奈々は公園の入り口で何も無い事を祈り、公園の道を入って行った。

？ 塾の帰りに

「じゃあね え」

塾の友達と別れ、自転車に乗って家に向かっていている時、ふと、いつも録っているお笑いの番組を予約してくるのを忘れた事に気づいた。

「あつ！ どうしよう」

考えながらペダルを踏んでいると。

「そうだ、公園の道を・・・でも、あの道は夜は通っちゃダメって学校で言われているんだっけ、でも・・・」

その公園の道は最近、奈々の学校の女子生徒が高校生くらいの人組に襲われたと言う事件があり、学校では通行禁止と言われている道なのだ、考えたすえに奈々は公園の道を通って帰る事にし、公園の入り口で。

「何も、出ませんように」

祈り、公園に入りキョロキョロしながら漕いでいると、いきなり、目の前に金髪の男が飛び出して来て。

「あつ！」

ブレーキをかけ停まると、金髪の男が。

「ねえ、ねえ、どこ行くの？ 一緒に遊ぼうよ」

「い、急いでいるんで、退いて下さい」

ペダルに足をかけた時。

「つれねえなあ、いいじゃんかあよ」

背後から、もう一人の金髪の男が現れると、奈々は身の危険を感じ逃げようしたが。

「逃げんなよ」

男たちの顔が変わり、自転車のかごと後輪を持たれ、芝生の上に転ばされた。

「キヤア」

起き上がるうとすると、男Bが手を押さえられ男Aが馬乗りになると。

「へへへえ、君ってカワイイね、俺、好みだよ、へへへえ」

笑いながら、服に手をかけた時。

「だ、誰か助けて え」

悲鳴を上げると。

「へへへえ、こんな夜に来る奴なんか、いねえよ」

服を破ろうとした時、男の頭に小石が中った。

「いてえ」

奈々から降り。

「誰だ、出てきやがれ え」

キョロキョロしていると、暗がりから少年が出て来ると、男Aが。

「誰だ あ、テメエ？」

「誰だつていいだろう、その子からを離してやれよ、このロリ野郎  
お」

「ふつ、助けたかったら、俺たちを倒してみやがれや あ」

男Aがもの凄い速さでパンチを繰り出すと、そのパンチは少年の  
ほほに食い込み少年は吹っ飛んだのを見たBが。

「出た あ、兄貴の殺人パンチ、あれを食らって平気な奴がい  
ねえぜ、いたら見てみてえぜ、ハハハ」

大笑いした。

「そ、そんな」

少年を心配そうに見ていると、指がピクリと動き。

「いててつ」

ほほをさすりながら立ち上がると。

「何！」

男たちは、あせり始めた。

「結構、効いたぜえ」

血を拭くと、少年の顔つきが変わり。

「パンチつてのは、こう出すんだよ　お」

Aのパンチより、速いパンチを腹に入れると。

「ぼふっ！　がはあああああ」

腹を押さえ、白目をむいて倒れたのを見たBは、奈々を離し。

「この野郎　お」

背後から、殴りかかった。

「キャッ」

奈々は手で目をふさいだ。

「がはあ、があああ」

声が聞こえ、恐る恐る指の隙間から見みると、Bの鼻を押さえ座っていて指の隙間からは大量の血が噴き出している。

「兄ちゃんたち、まだ、やるかい？」

Bは首を左右に振り、倒れているAをかかえ立ち去って行くと、少年は倒れている自転車を起こして、奈々の所に来て。

「大丈夫、ケガない？」

手を差し出すと。

「は・はい」

手につかまり、立ち上がると。

「あ、ありがとう」

礼を言くと、少年は。

「気を付けて、帰りな」

走り去って行き、奈々も家に帰り中に入って部屋で着替えてリビングに行く。

「ただいま」

「おかえり、遅かったわね？」

「う、うん、コンビニで立ち読みしてきたの」

「ふん、そう」

嘘つき、部屋で明日の用意をして下着を持って部屋を出た。

？ 昨日の少年

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門をくぐり、校庭を歩いていると隣に同じクラスで幼なじみの竹川沙織が来て。

「おはよう、奈々」

「おはよう、沙織ちゃん」

挨拶を交わし、歩きながら。

「ねえ、昨日の見た？」

「昨日は、見るの忘れちゃったの」

「面白かったのに」

「ふん、そうだったんだ、残念」

教室に行き、席に座り机の中に授業道具を入れていると。

キンコーン、カンコーン、キンコーン、カンコーン。

チャイムが鳴ると、担任が入って来て教壇の上に出席簿を置き。

「えへえ、今日は出席を取る前に、新しいお友達を紹介します」

言つと、教室中が騒がしくなると。

「静かにして下さい」

生徒たちが静まると、老化に向かって。

「じゃあ、入って来て下さい」

廊下側から、1人の男子生徒が入って来た。

「はっ！」

奈々は驚いた、その男子生徒は昨日、不良たちから奈々を助けてくれた少年だった、担任がボードに小川光良と書き、光良の肩に手を置き。

「小川光良くん、皆、仲よくしましょうね」

「はい」

返事をする。

「じゃあ、小川くん一言、お願いします」  
肩をポンと叩くと。

「初めまして、小川光良です、よろしくお願いします」  
頭を下げると、拍手がわき。

「岡崎さん」

担任が奈々を呼んだ。

「はい」

返事をする、光良に。

「小川くん、あの子の隣に座ってくれるかな？」

「はい」

返事をして、あたえられた席に方に歩いて来て奈々を見て。

「君は、昨日の」

「私、岡崎奈々、よろしくねえ」

「うん、仲良くしようね」

座ると、出席を取り授業を始めた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると。

「奈々、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き沙織の家の前で。

「ねえ、宿題しようよ？」

「うん、いいよ、これ置いてくるね」

別れ、家に帰り中に入って部屋にランドセルの中から宿題を出し、  
手提げに入れ部屋を出てリビングに行き母親に。

「沙織ちゃん家で、宿題して来るね」

家を出て、自転車に乗り沙織の家に向かった。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、ドアが開き沙  
織が顔を出し。

「いらっしゃい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋を入るとテーブルが用意しており2人は宿題を始め1時間後、奈々はノートを閉じて。

「終わった、沙織ちゃんは？」

「もう、ちよつと」

数分後。

「終わった」

沙織もノートを閉じると。

「ジューズ持ってから、本でも見てて」

部屋から出て行くと、奈々は本棚からマンガ本を出し見ていると、お菓子と缶ジューズを持って来て。

「はい」

「ありがとう」

飲みながら、マンガ本を見て数分後、見終えて。

「そろそろ、帰るね」

「うん、バイバイ」

沙織の家を出て、家に帰った。

？ キュン

光良が転校して1週間が経とうとしていた。

光良は頭が良く、スポーツ万能なのでクラスの人気者になっていた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門の所で、沙織に逢い。

「おはよう、奈々」

「おはよう、沙織ちゃん」

挨拶を交わし、教室で授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると。

「奈々、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き沙織の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰り中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

冷蔵庫からジュースのボトルを出しグラスに注ぎ飲み、部屋で宿題を始め問題を解いていて間違えて、筆箱の中から消しゴムを出して小さくなった消しゴムを見て。

「買いに行こう」

財布を持って家を出て、自転車に乗って文房具店に向かった。

文房具店に行く途中で、キョロキョロしている光良が見え。

(どうしたんだろう?)

光良の元に行き。

「小川くん、どうしたの?」

「あっ! 岡崎さん、文房具店ってどこだか教えて?」

「いいよ、一緒に行こう」

2人は、文房具店に向かった。

文房具店に着き、自転車を降りて店内に入り奈々は消しゴムとついでにかえ芯を、光良も替え芯とノートを2冊持ってレジで支払いをして店を出た時、笑みを浮かべて。

「ありがとう、助かったよ」

礼を言われた時、奈々の胸がキュンと締め付けられる感じがして。

(何、この感じ?)

胸を押さえていると、心配そうに。

「どうしたの、大丈夫?」

「うん、大丈夫だよ、じゃあね」

家に帰り、部屋で宿題の続きをしながら、光良といた時に感じた感じの事を考えた。

「あれって、何だったんだろう?」

しばらく考えたが。

「まっ、いいか」

宿題に集中した。

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、沙織に逢い。

「おはよう、奈々」

「おはよう、沙織ちゃん」

校庭を歩いていると、隣に光良が来て。

「おはよう」

「おはよう、小川くん」

沙織は挨拶したが、奈々はまた胸が締め付けられる感じがし。

(あっ！ まだだ)

歩いていると。

「小川くん、もう学校に慣れた？」

「うん、少しね」

笑みを浮かべ答え、教室に行き授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に、授業道具を入れていると。

「奈々、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き沙織の家の前で。

「買い物に、付き合ってよ？」

「うん、いいよ」

別れ、家に帰り中に入って部屋にランドセルを置き、財布を持って部屋を出てリビングに行き母親に。

「沙織ちゃんと、買い物に行つて来るね」

家を出て、自転車に乗って沙織の家に向かった。

家の前で、沙織が待っている。

「お待ちどう」

「行くっ？」

「うん」

近くのスーパーに向かった。

スーパーに着き、自転車を降りて店内に入り買い物かごを持ち、シャンプーとリンスの詰め替えと生理用のナプキンを入れたのを見て。

「沙織ちゃん、もう？」

「奈々は、まだなの？」

「う、うん……」

レジで支払いをして店を出て、自動販売機の前で沙織はお金を入れ。

「どうぞ」

「えっ！ いいの」

「うん」

「じゃあ」

スポーツ飲料のボタンを押すと、ガタンツと商品が落ちて来て取り出すと、沙織も同じのを買って来た道を戻り沙織の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰り中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

「夕飯、出来たら呼んでね」

部屋に行き、宿題を始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9496x/>

---

これからも、彼女で

2011年10月28日13時07分発行